

<学術論文>

『不思議の国のアリス』における三人称代名詞の翻訳

金子史彦 信州大学学術研究院教育学系

キーワード：不思議の国のアリス，三人称代名詞，意識，直訳

1. はじめに

ルイス・キャロル (Lewis Carroll) 著の『不思議の国のアリス』(*Alice's Adventures in Wonderland*)¹ は様々な言葉遊びに代表される，言葉そのものに着目させる仕掛けに富んだ作品である。そしてそれが翻訳する上での大きな障壁となる。何故なら内容だけでなく，その内容を形作っている言葉そのものも重視して翻訳する必要があるからである。もう少し具体的にみてみよう。翻訳には大きく分けて意識と直訳がある。直訳と意識について森岡健二 (1968) は次のように定義づけている：

○意識とは，意味に忠実な翻訳。外国語の字句や言い廻しを犠牲にするかもしれないが，実を取って意味に忠実に，その内容を自然な日本語に置き換えようとするもの。

○直訳とは，外国語の字句や言い廻しに忠実な翻訳。日本語としての意味や自然さを犠牲にするかもしれないが，外国語を逐語的に日本語に置き換え，外国語風の表現を日本語で再現しようとするもの。(p. 21)

また 2018 年に出版された『広辞苑』の第七版では意識は「原文の一語一語にこだわらず，全体の意味に重点をおいて訳すこと。」(p. 211)，直訳は「外国語をその原文の字句や語法に忠実に翻訳すること。」(p. 1916)，と定義されている。意識は意味，つまり字句が指し示す内容を重視，直訳は形式，つまり字句そのものを重視して日本語で再現をしようとするわけだが，言葉遊びを翻訳する場合はその両方を重視する必要がある。性質の異なる言語で再現することが容易でないゆえんである。また『アリス』のような形式，つまり言語そのものと内容の両方を重視する必要がある作品の翻訳について分析する場合，そのそれぞれを重視した翻訳である直訳と意識をキーポイントとすることが適切であると思われる。

本稿では『アリス』の中で用いられている三人称代名詞の *him* の翻訳について検証す

¹ 以下必要に応じて『アリス』と省略する。『』のついていないアリスは作品名ではなく登場人物を指す。

る。柳父章 (2003) は「固有の三人称の人称代名詞は、日本語にはもともとなかった」(p. 172) のであり「三人称代名詞としての「彼」は、やはり明治以後、翻訳の必要や、翻訳調の文、西欧文の影響を受けた文を書く上で発達してきた」(p. 172) とし、「西欧語に著しく、日本語で貧弱である。しかも、構文上、論理展開上、思想表現上の機能が重要である。翻訳の問題の、一つの焦点である、と考える。」(p. 171) と述べる。『アリス』で *him* が言葉遊び的に用いられ、さらに正しく論理展開上重要な機能を持つ場面がある。日本語では日常語としては余り自然な形で用いられない三人称代名詞の「彼」に当たる、論理展開上重要な *him* の翻訳を、実例の分析を通して検証するのが本稿の目的である。

2. 代名詞の選択で表されるアリスと帽子屋の認識のズレ

自分自身でも正解を知らない謎々を問いかける帽子屋 (*the Hatter*) 及び三月ウサギ (*the March Hare*) にあきれたアリス (*Alice*) とその帽子屋のやり取りは、*time* に関する両者の認識のズレから思わぬ方向へと発展する。以下がそのやり取りである:

Alice sighed wearily. “I think you might do something better with the time,” she said, “than wasting it in asking riddles that have no answers.”

“If you knew Time as well as I do,” said the Hatter, “you wouldn’t talk about wasting *it*. It’s *him*.”

“I don’t know what you mean,” said Alice.

“Of course you don’t!” the Hatter said, tossing his head contemptuously. “I daresay you never even spoke to Time!”

“Perhaps not,” Alice cautiously replied; “but I know I have to beat time when I learn music.”

“Ah! That accounts for it,” said the Hatter. “He wo’n’t stand beating. Now, if you only kept on good terms with him, he’d do almost anything you liked with the clock. For instance, suppose it were nine o’clock in the morning, just time to begin lessons: you’d only have to whisper a hint to Time, and round goes the clock in a twinkling! Half-past one, time for dinner!”

(“I only wish it was,” the March Hare said to itself in a whisper.)

“That would be grand, certainly,” said Alice thoughtfully; “but then—I shouldn’t be hungry for it, you know.”

“Not at first, perhaps,” said the Hatter: “but you could keep it to half-past one as long as you liked.”

“Is that the way *you* manage?” Alice asked.

The Hatter shook his head mournfully. “Not I!” he replied. “We quarreled last March—just before he went mad, you know—” (pointing with his teaspoon at the March Hare,) “—it was

at the great concert given by the Queen of Hearts, and I had to sing

You know the song, perhaps?”

“I’ve heard something like it,” said Alice.

“It goes on, you know,” the Hatter continued, “in this way:

“Well, I’d hardly finished the first verse,” said the Hatter, “when the Queen bawled out ‘He’s murdering the time! Off with his head!’”

“How dreadfully savage!” exclaimed Alice.

“And ever since that,” the Hatter went on in a mournful tone, “he wo’n’t do a thing I ask! It’s always six o’clock now.” (Carroll, 2013, p. 54-56, 下線は筆者が加筆)

アリスが「拍子をとる」の意味で言った“beat time”を「timeを打つ」と解釈したり，“kill time”の誇張された表現と思われるハートの女王 (the Queen of Hearts) が発した“murdering the time”のままに time と仲たがいしてしまったと思ひ込んだり、帽子屋が慣用句を字義通りに解釈してそれによって話が展開していく。こういった展開は『アリス』の中でよく見る光景である。

本稿で注目したいのはこの冒頭の部分、time を受ける代名詞の選択でアリスと帽子屋の意見が食い違う場面である。アリスが it を使用したのに対し帽子屋は him の使用を主張する。帽子屋の主張にはどのような意図があるのだろうか。解釈できるのは Time は物、無生物ではなく生物であるという主張である²。その後、帽子屋が Time と友好関係を保つことの利点について説明することもその解釈を裏付けている。このやりとりはアリスと帽子屋の間に time の認識のズレが存在しそれが代名詞の選択の問題で表されている。そしてそれを強調するかのようその代名詞はイタリック体になっている：“you wouldn’t talk about wasting it. It’s him.” (Carroll, 2013, p. 54, 下線は筆者が加筆)。代名詞の選択という言語・形式と認識のズレという意味・内容が不可分に結びついているのだ。

翻訳者たちはこれをどのように訳してきたのであろうか³。以下が翻訳者たちによる訳である：

河合祥一郎 (2016)：「もっとましな時間の使い方があるんじゃないかしら」とアリス。「答えのないなぞなぞなんかで時間をつぶしたりしていないで。」「わたしのよう
に時間さんのことをよくわかっていたら」と帽子屋ぼうしやが言いました。「《時間をつぶす》なんて言わないだろうよ。時間さんだ。」(p. 95-96)

楠本君恵 (2020)：「時間をもっと有効に使ったほうがいいと思いますけど。答えのないなぞなぞを出して、それを無駄に使ったりしないで」「もしあんたがタイムさん

² Time と頭文字を大文字で書く場合は帽子屋の言う Time を特定している。

³ 上で引用された原文の3行目の “It’s him.” までの部分。

を私くらいよく知っていたら」とハッターが言った。「それを無駄に使うなんて言わないだろうな。その人と言うね」(p. 105)

佐野真奈美 (2016): 「時間をもっと大切にしなくちゃ。答えのないなぞなぞなんて出したら、時間のむだでしょ?」「きみがおれと同じくらい時間のことをよく知っていたとしたら、『時間がむだ』なんていいかたはしないだろうね。あの入のことをそんなふうにいわないはずだ」(p. 114)

高橋康也・高橋迪 (2016): 「あなたたちったら、答えのないなぞなぞをやって時間をつぶすより、もっとまじな時間の使いかたがありそうなものね」アリスはいいました。「わしみたいに時間のことをよく知っとったら」と帽子屋はいいました。「あんたも、つぶすなどとはいわんじやろうに。時間は生きものなんじゃから」(p. 91)

高山宏 (2015): 「もっと大事なことに使うべきじゃないの、こんな間があつたら」とアリスは言います。「それを答えのないなぞなぞでむだ使いなんかして」「あんた、マのやつとわたしみたいにつき合いがあつたら」と帽子屋、『それを』なんて言わないはずだがな、『彼を』だよ」(p. 106-107)

高山宏 (2020): 「この間合^{まひ}いだけど」とアリスは言います。「答のないなぞなぞするよりまともなその使い方、何かないのかしらね」「この間合^{まひ}いってかい。こっちと同じくらいマに合ったことがあるとすれば」と帽子屋、「第一、その使い方なんて言うまいよ。彼の使い方、だろ、当然」(p. 193)

脇明子 (2015): 「時間をもっと有効^{ゆうこう}に利用すべきだと思うわ」と言いました。「答えのないなぞなぞに使うなんて、時間のむだよ。」「あんたがわたしのように、時間のことをよく存^{ぞん}じあげておつたら」と、帽子屋が言いました。「そんな失礼なことは言わんだろうよ。時間がむだとは、まったく。」(p. 121)

矢川澄子 (2014): 「こたえのないなぞなぞなんかでひまつぶすより、もっと時間をだいにすればいいのに」「あんた、おれくらい時間君を知っていたら、そんなふう呼びすてにしやしまいな。くんなんだぞ」(p. 98-99)

柳瀬尚紀 (2015): 「時間をむだにするだけだと思います」彼女はいった。「答えのない謎なぞを出してなんかいたら」「わたしと同じくらい時間のことを知っておればだな」帽子屋がいった。「時間をぶたにするなんて言い方はせんだろうよ。時間はちゃんとした男だ」(p. 98-99)

安井泉 (2017): 「時間をもっと有効^{ゆうこう}に使うべきだわ」アリスは言います。「答えのないなぞなぞなんかソレを費やしてむだにすべきではないわ」「あんたもわしみたいに『時爺さん』と知り合いなら、少なくとも『ソレ』をむだにするなんて言い方はしないだろうよ。『カレ』なんだからな!」と帽子屋が言います。(p. 165)

アリスと帽子屋の **time** に関する認識のズレという原文の根幹は全ての訳において日本語で再現されている。しかしそのズレを代名詞の問題に発展させるという部分を原文に忠実

に訳しているのは高山宏 (2015) , 高山宏 (2020) , 安井泉 (2017) のみである。高山宏 (2015) , 高山宏 (2020) , 安井泉 (2017) はこの代名詞に関しては直訳なわけである。その他は意識である。

3. 意識

意識では **him** に当たる日本語として「彼」のような三人称代名詞を使用することは回避されている。代名詞の選択の問題を再現することをしないで、アリスと帽子屋の認識のズレを表現することに努めている。

意識のうち楠本君恵 (2020) , 佐野真奈美 (2016) , 高橋康也・高橋迪 (2016) , 柳瀬尚紀 (2015) は、**him** に当たる部分に人間や生物を明確に指す言葉を充てて、帽子屋の「**Time** は生物である」という原文の意味を忠実に再現している。一方、河合祥一郎 (2016) , 脇明子 (2015) , 矢川澄子 (2014) では、帽子屋が **Time** に通常人間に対して用いられる接尾語を付けることを主張したり、敬意をもって接することを主張したりするようになっている。これは帽子屋が **Time** を人間扱いすることを主張、つまり生物であると主張しているという様に解釈できるが、さらに解釈を広げることも可能だ。

帽子屋の主張、*“you wouldn’t talk about wasting it. It’s him.”* (Carroll, 2013, p. 54, 下線は筆者が加筆) を「**Time** は無生物ではなく生物」という意味ではなく「**Time** は人間並みに扱われるべき特定の動物であり、敬意をもって扱われるべき」という意味に解釈することも可能なのだ。この場合 *it* は特定されない動物の種類一般を、**him** は特定の動物を指している。稲木昭子・沖田知子は次のように述べる:

このアリスのことばを捕まえて、「時漢を知っていたら、『時間潰し』なんて口のききようはしないだろうな。人並にしないと」と揚げ足とりをする。どうやら時間を時漢と擬人化するので、*it* ではなく **him** と人間並みに扱わなければならないらしい。アリスにとってはあくまで一般的な意味での **time** (小文字) でしかないのを、帽子屋は擬人化して時漢 (**Time** と大文字で固有名詞を表す) と考えるので、それを代名詞に反映させると、*it* と **he** という違いがまず出てくる。この両者の立場の違いがこのあと、やりとりの基調になり、時との関係を示す表現が次々とまな板に上るのである。(p. 106)

つまり **Time** を **him** で受けるべきだという主張は、**Time** を一般名詞ではなく特定のものを指すと主張しているというのであり、それが人間並みに扱われるべきであるということでもあるというのだ。Longman Dictionary of Contemporary English の **he** の項目で第一に記載されている定義は “that male person or animal already mentioned” (p. 483) である。この解釈の場合も帽子屋が **time** を動物、つまり生物と考えていることが前提になっているが、ここでの帽子屋の主張は生物であるということは当たり前のことであって、その上で **Time** が

特別な存在であることを主張しているということになる。そして帽子屋は動物である三月ウサギに言及する時に *he* を用いる: “‘We quarreled last March—just before he went mad, you know—’ (pointing with his teaspoon at the March Hare,)” (Carroll, 2013, p. 54-55, 下線は筆者が加筆)。一方、地の文で三月ウサギが言及される時は *he* の時も *it* の時も両方あり、その使い分けに規則性は感じられない。そのような状況から、帽子屋にとって *Time* は三月ウサギ同様特別な存在である、ということのアピールから *him* で受けるべきである、と主張しているという解釈も成り立つ。

そのような点から考えると河合祥一郎 (2016) , 脇明子 (2015) , 矢川澄子 (2014) は原文の意味により忠実に、その内容を自然な日本語に置き換えていると言えるかもしれない。その反面、楠本君恵 (2020) , 佐野真奈美 (2016) , 高橋康也・高橋迪 (2016) , 柳瀬尚紀 (2015) に比べて解釈の幅が広いため、意味の決定を読者の判断に委ねる面があり明快さに欠ける。

尤も『アリス』自体が玉虫色の作品でもある。帽子屋は現実の世界の感覚では無生物である *Time* を生物と見なしているわけであるが、それに対してアリスが異を唱える場面は無い。*Beat time* のことで食い違いがあった後、アリスは帽子屋の *Time* が生物であることを前提とした話に真剣に耳を傾けている。一方でアリスは髪を切るべきだという帽子屋の唐突なアドバイスを無礼だと撥ね付けたり: “‘Your hair wants cutting,’ said the Hatter. He had been looking at Alice for some time with great curiosity, and this was his first speech. ‘You should learn not to make personal remarks,’ Alice said with some severity: ‘It’s very rude.’” (Carroll, 2013, p. 53) , 言葉の意味を字義通りに解釈する帽子屋の揚げ足取りを撥ね付けたりしている: “‘Take some more tea,’ the March Hare said to Alice, very earnestly. ‘I’ve had nothing yet,’ Alice replied in an offended tone: ‘so I ca’n’t take more.’ ‘You mean you ca’n’t take *less*,’ said the Hatter: ‘it’s very easy to take *more* than nothing.’ ‘Nobody asked *your* opinion,’ said Alice.” (Carroll, 2013, p. 57) 。またアリスは現実の世界の感覚では無生物であるトランプの人間化された姿に接して、それがトランプに過ぎないということを看破し、恐れるに足らずと判断しながらも: “‘My name is Alice, so please your Majesty,’ said Alice very politely; but she added, to herself, ‘Why, they’re only a pack of cards, after all. I needn’t be afraid of them!’” (Carroll, 2013, p. 61) , ハートの女王を恐れる場面も有る: “Alice did not quite like the look of the creature, but on the whole she thought it would be quite as safe to stay with it as to go after that savage Queen: so she waited.” (Carroll, 2013, p. 72) 。帽子屋の *Time* についての話に対するアリスの態度は、このトランプに対する態度に重なる。帽子屋の主張が「*Time* は無生物ではなく生物」という意味であるのか、「*Time* は人間並みに扱われるべき特定の動物であり、敬意をもって扱われるべき」という意味であるのかということの曖昧さも含めて、玉虫色な『アリス』の作品世界により忠実な訳が河合祥一郎 (2016) , 脇明子 (2015) , 矢川澄子 (2014) であると言えるかもしれない。

このように意識では、*him* を直接日本語に置き換えることを回避し、原文の意味、内容

のみを再現することを目指している。

4. 直訳,

高山宏 (2015), 高山宏 (2020), 安井泉 (2017) は *him* を「彼」や「カレ」, *it* を「それ」「その」と直訳し, アリスと帽子屋の *time* を受ける代名詞の食い違いを日本語で再現しようと試みている。そしてその代名詞の訳語を括弧で括ったりカタカナで書いたりルビを付けたりといった方法で着目を促しているが, 原文でそれら代名詞がイタリック体にされていることと呼応していると言える。そのことにより日本語としての自然さを犠牲にしているだろうか。

柳父章 (2003) は英語における *he* と同じ感覚で「彼」を使用すると不自然さが否めないということを述べている:

英語などの横文字の文章を, 私たちが読んでいて, 人称代名詞についてまず気づくのは, いくらでもくり返されている, ということであろう。He said, ……He said, ……のようにいくらでもくり返され, くり返されることが決して邪魔になっていない。邪魔になるよりも, むしろ, 文章に人間味がこめられることによって, 読者は親しみをもつ, とさえ言われるのである。この点は, 日本語の文とまったく逆である。日本文を書くときは, 「私」も, 「彼」も「彼女」も, 書き手はできるだけ避けようとしている。使わないですむならつとめて書かない。読み手も, それを自然に受けとめるのである。(p. 181)

それでは *him* を「彼」と訳している高山宏 (2015), 高山宏 (2020), 安井泉 (2017) は自然さを犠牲にしているのだろうか。原文のこの部分の続きの訳も併せて考えてみよう。

第2章の冒頭で引用した原文の中で, 本文で翻訳を検証している部分より後⁴で登場する人称代名詞 *he* とその格変化形 (*Time* を受けるものには「_____」, それ以外のものには「_____」が引かれている) は全て, 高山宏 (2015), 高山宏 (2020), 安井泉 (2017) では「彼」と訳されてはいない。「時爺さん」「マ」等 *Time* の訳語に当たる固有名詞や「やつ」等の一般名詞が充てられていたり, 代名詞の部分が全く訳されていない=ゼロ代名詞が使用されていたりする。つまり原文では帽子屋は自分自身の主張に則り *Time* のことを一貫して人称代名詞 *he* とその格変化形で受けているのだが, 和訳ではそれが反映されていないのだ。さらにこの部分が含まれている章である『アリス』の第7章全体で, 高山宏 (2015), 高山宏 (2020), 安井泉 (2017) では「彼」「カレ」は本稿で検証している *him* の

⁴ 2章で引用された原文の3行目の “It’s *him*.” より後の部分。

訳を除いて全く登場しない⁵。つまり柳父章 (2003) の主張する通り、「彼」を出来るだけ使わないように努め、自然さの犠牲を最小限に止めているのだ。

原文ではこの *him* 以外にも何度も人称代名詞 *he* とその格変化形が出てくる。英語では柳父章 (2003) も言うように *he* が繰り返されることよって「むしろ、文章に人間味がこめられることによって、読者は親しみをもつ、とさえ言われる」(p. 181)。ここでも *Time* を指す *he* が繰り返されることにより、読者は帽子屋にとって *Time* が生物であることを受け入れていくのであろう。しかし日本語で「彼」を繰り返し使うと不自然になる。そこで高山宏 (2015), 高山宏 (2020), 安井泉 (2017) は、帽子屋が *Time* を受ける代名詞は *him* だと主張しているまさにその一回、人称代名詞としての *him* その存在自体が重要な意味を持っている言い廻しの一回だけ、原文の英語的表現を再現するために避けて通れない時だけ「彼」「カレ」と訳している。論理展開上重要な機能を持つ *him* の部分だけ直訳し、他の人称代名詞 *he* とその格変化形に関しては意識を採っているのだ。もし原文の帽子屋が *Time* のことを *him* で言及した箇所すべてを「彼」「カレ」と訳していれば原文の英語的表現をより忠実に再現することは出来たであろうが、その反面日本語としての自然さがより犠牲となる。

このように直訳の高山宏 (2015), 高山宏 (2020), 安井泉 (2017) は原文の英語的表現の再現性、原文の意味、そして日本語の自然さの折り合いをつけることを目指した翻訳である。

5. おわりに

多数の言葉遊びを含み、話の内容のみならずそれを形作っている言葉そのものにも着目させる『不思議の国のアリス』は、原文に忠実に翻訳するということが容易ではない。内容も形式も共に重要であり、彼方を立てれば此方が立たずということになるのである。その例として、本稿では三人称代名詞の *him* が論理展開上重要な機能を持つ箇所を検証した。そして内容、意味を重視した意識の中にも色々な種類があったり、また一部は直訳するが他の部分は意識するといった折り合いをつける工夫をしたりと、この翻訳が正解という絶対的な解答は存在しないことが確認された。筆者は先ず原文でこの英語での代名詞の選択の問題を理解し、その後意識して和訳を読んだ。予備知識の無い状態でこの和訳を読んだ場合はどうなるのか、原文で理解出来ない場合に和訳を読んだ場合どのような効果が認められるのか、意識と直訳ではどうか、そしてそれらの分析結果をどのように英語教育に活用していくことが可能であるのか、等々は今後の研究の課題である。

⁵ 河合祥一郎 (2016), 楠本君恵 (2020), 佐野真奈美 (2016), 高橋康也・高橋迪 (2016), 脇明子 (2015), 矢川澄子 (2014), 柳瀬尚紀 (2015) の第7章では「彼」は一度も登場しない。

『不思議の国のアリス』における三人称代名詞の翻訳

文献

- 稲木昭子・沖田知子 (2015) 『アリスのことば学 不思議の国のプリズム』大阪大学出版会.
- Carroll, Lewis (2013) *Alice's in Wonderland*, Edited by Gray, Donald J., New York: Norton & Company.
- キャロル, ルイス (2016) 『不思議の国のアリス』河合祥一郎訳, 株式会社 KADOKAWA.
- キャロル, ルイス (2020) 『不思議の国のアリス』楠本君恵訳, グラフィック社.
- キャロル, ルイス (2016) 『不思議の国のアリス』佐野真奈美訳, ポプラ社.
- キャロル, ルイス (2016) 『不思議の国のアリス』高橋康也・高橋迪訳, 新書館.
- キャロル, ルイス (2015) 『不思議の国のアリス』高山宏訳, 亜紀書房.
- キャロル, ルイス・ガードナー, マーティン (2020) 『詳注アリス』高山宏訳, 亜紀書房.
- キャロル, ルイス (2015) 『不思議の国のアリス』協明子訳, 岩波書店.
- キャロル, ルイス (2014) 『不思議の国のアリス』矢川澄子訳, 新潮社.
- キャロル, ルイス (2015) 『不思議の国のアリス』柳瀬尚紀訳, 筑摩書房.
- キャロル, ルイス (2017) 『不思議の国のアリス』安井泉訳, 研究社.
- 『広辞苑 第七版』(2018) 岩波書店.
- 森岡健二 (1968) 「翻訳における意識と直訳」『言語生活』, 197, 21-31.
- 柳父章 (2003) 『翻訳とはなにか』法政大学出版局.
- Longman Dictionary of Contemporary English* (1988) Harlow: Longman.

(2022年 9月27日 受付)

(2023年 2月 6日 受理)